【FD 座談会】

税法修士論文指導の一層の進化を目指して

租税法研究指導 ＜税法専門＞	伊東博之教授（誌上参加）
	小山登教授
＜構成指導＞	慶松勝太郎特任教授
	山本宣明教授（司会）
	春日潤一講師
＜システム＞	横井隆志講師

開催日　2014 年 12 月 11 日（木）

はじめに

山本　本日はお集まりいただきありがとうございます。前号（LEC 会計大学院紀要第 11 号）は、修了生を囲んで「LEC 会計大学院修士論文指導の軌跡と論文作成の意義」というテーマで座談会を実施いたしました。今回はそれを受けまして、2015 年度以降に向かい、①本学における税法修士論文指導において現在どういった課題があるのか、②またその課題をクリアしていくためにはどういった方策が考えられるのか、という点をテーマの中心として座談会を進めてまいりたいと思います。ご参加いただくのは、2010 年度税法科目修士論文指導開設当初から携わっていただいている慶松先生・伊東先生・小山先生、2011 年度から加わっていただいた春日先生、そして一貫して IT サポートをしていただいている横井先生です。どうぞ宜しくお願い致します。

LEC 会計大学院　教授　山本宣明

Ⅰ．税法修士論文指導の現状の課題

山本　さて早速、本日のテーマの１つ目「本学における税法科目修士論文指導におい

て、現在どういった課題があるのか」という点につき、話を進めてまいりたいと思います。

2014 年度はそれまでの 4 班体制から 3 班体制に移行しつつあり、各班によって少なからず指導のやり方が異なっているかと思いますが、各班の先生方の指導方法や意識をできるかぎり共有することがまずは大切なのではないかと感じています。

本学の税法修士論文指導の方法という点で非常に特長的なのが、「マイルストーン管理」です。修士論文の作成をいくつかの段階に分けて指導していく、という方法で、指導する学生数が非常に多いという今の状況でも、この体制によって対応ができているということが言えます。

マイルストーン管理の効果としては、段階毎に区分ができるということが最大のメリットである一方で、その区分の中で教員・学生ともに作成の初期段階（序論クラス）と作成の最終段階（完成クラス）における負担がとりわけ非常に大きくなってしまっているという問題があるように思われます。これは、ある程度、指導する先生方の間でも共通の思いなのではないでしょうか。

まず､マイルストーン管理を前提として、先生方が指導において苦労されているポイントにつきお伺いしたいと思います。慶松先生からお願いできますでしょうか。

1．序論作成指導のポイントと生産性

慶松　作成の初期段階で、なかなか序論がうまく書けないという学生もいます。おそらくそれには 2 つの要因が考えられます。

「どういうものを書こうか」という目的意識があまりはっきりしないという点が 1 つです。「何を材料にしてどういう料理をするのだ」ということが明確であれば序論作成はそう苦労しないで進めていけると思うのですが、それが明確でないと逆に非常に苦労します。2 つ目は、自分が考えていることをうまく表現することができない、という点です。それにはまた 2 つ理由があって、1 つには、序論をまとめていくにあたり、ある程度具象性のあるものを抽象化しなければいけないという作業がありますが、抽象化ということに慣れていないということですね。もう 1 つには、文章にしていく中で、自分が考えていることを的確に表現する、その言葉がうまく見つからない、という点です。序論作成の段階では以上のような問題があるのではないかと感じています。

LEC 会計大学院　特任教授　慶松勝太郎

春日　伊東・春日班では指導を分業化していまして、税法的内容については、伊東先生に完全にお任せしています。文章構成指導を担当する私としては、最近はどちらかというと序論作成においての指導はスムーズになってきている、という印象を持って

います。序論の文面をしっかりと作り上げるということと、目次が非常に重要と思いますので、目次でいかに構想が具体化できているかという点を、学生とやりとりしながら確認をしています。なかなか具体化できておらず、そこでかなり時間をとったりということは、やはりありますが。

序論の文面は、何回も添削の回数を重ねていかないとなかなか形になっていかない、ということも確かにあるのですが、15 回の授業の中で少しずつ手を加えながらやっていくことによって、大多数の方が最終的には形になっています。

LEC 会計大学院　講師　春日潤一

山本　確かに伊東・春日班はチーム力と言いますか、生産性が非常に高く、やはり分業体制の確立ということが大きいのかもしれないですね。

小山・慶松班や細川・山本班では、役割として一応、税法指導と構成指導で分かれているとはいえ、実際は構成指導担当教員もその枠を超えてかなり税法の中身に入り込んだ指導もしているのが現状です。かといって、日頃の指導内容を見ていると、春日先生が全く税法の中身に入っていないとは思えないのですが。そのへんは絶妙な組み合わせというところはありますね。

春日　序論作成の段階では、文面上で明らかに知識が不足していると思われるような場合は多々あるので、これまでの指導経験から得た知識を踏まえて指摘できる限り指摘はしています。学生とのやり取りの中で、明らかに分かっていないな、ということがあれば、もう少ししっかり読んで下さい、ということはアドバイスしていますね。

税法的な意識のもっていきかたという点を、伊東先生が日頃どのように指導されているのか、ぜひお伺いしたいところです。

伊東　マイルストーン管理を徹底することを大前提として、個人的には目的がはっきり把握されているかどうかを重視します。そして早く税法的な思考に慣れてほしい、学説、判決文を読むことに慣れてほしいと思います。そこで、多くの文献、判決文に接することを勧めるようにしています。他人の文章を読み、自ら書き上げて、自分の文章を読む、最後に教員に読んでもらう、というローテーションを繰り返していくことで、おのずとテーマは絞られるのではないかと思っています。

山本　小山先生からも序論について、お話を伺いたいのですが。

小山　修士論文のテーマを決める時の難しさということを非常に感じています。テーマを決定していく際には、まず国税庁の「税大論叢」にあたることからスタートし、その中で自分のテーマを決定していくという方法が一番良いのではないか、と私は思っています。参考文献も非常に多いですので。ですから、ここ数年は学生に必ず「税大論叢」を先に見て下さいと話をし、学生が調べてきた結果をもってどのようなテ

ーマに興味があるか、という流れで指導をしています。

LEC 会計大学院　教授　小山登

山本　序論で難しいのは、やはりテーマをどうするか、つまり慶松先生のお言葉を借りれば、目的意識をどの辺に持つのかということが非常に重要で、更に修士論文とはどういうものなのかという理解がそもそもないと、なかなか方向性がすっきりと見えてこない、ということがありますね。

ある程度目的意識がはっきりしてきても、一方でそれをどう表現すれば良いのかというところがうまくいかない。そういった点で本学の修士論文指導のもう１つの特色である、税法専門教員＋構成指導担当教員の「ダブル指導体制」が非常に効果的に働いている面があると思います。

ちなみに、税法科目修士論文指導開設初年度の 2010 年度入学生の時代、序論合格第１号は２月１日でした。現在は、それより 3 か月早い 10 月末には合格者が出ている状況で、開設当初よりもかなり生産性があがっていると思います。

春日　全体をみても、序論合格は早くなってきていますよね。

慶松　確かに序論に早く合格して次のステップに進んでほしいということはありますが、逆になかなか序論合格にならない学生もいます。

序論を作成する時にいつも気になるのが「正確に書いてほしい」ということです。例えば「本法にこう書いてある」という表記の場合、私としては、それは税法の第何条という明確な根拠があって「本法に」と書いているのだと思いますが、いざ学生から説明を受けてみるとそうではなくて、「第〇条〇項で会計に準拠する」と、「会計に準拠する」とは何かというと、それはまた「民法に準拠する」と、そういう二段構えになって税法に結びついている、という訳なのです。そうなると「本法に書いてある」とは到底言えないわけですね。そういうことは正確に書いてほしいと思います。

山本　表現を厳密に捉えるということと、構想をしっかりとさせるということは、非常に相関関係がありますね。

伝統的な論文指導は１人の指導教員がすべて一体的にやることになるので、どうしても内容面の指導に偏ってしまい、形式面にまでなかなか指導が行き届かない場合が多いです。本来ならば、表現も含めて厳密にしなければ頭の中がきちっと整理されないはずなのですが。そういう面でもやはりダブル指導体制は非常に意味があるのではないかと感じています。

春日　複数の教員の手が加わることによって、文章のブラッシュアップという点でかなり効果が高くなっていると感じています。特に最近合格が早くなってきているのは、やはり第三の手といますか、文章指導の若

い先生方の力が大きいのかなと思います。

２．アカデミック・ライティングの効果性の向上

山本　「この、その、あの」という指示代名詞を極力使わない、また、「について」を極力排除するという文章指導の方法論は、文章を良くするための大きな手がかりになると感じています。これは、そもそも学術的な文章の書き方トレーニング、つまり「アカデミック・ライティング」をスタートさせたことから発展してきていると思います。

　アカデミック・ライティングはいつスタートでしたか？

春日　2012 年度です。

山本　それが非常に効いてきているという面はあります。

　ただ、アカデミック・ライティングに取り組むにあたって課題もあり、学生自身が単純にアカデミック・ライティングの課題をこなしているだけで終わってしまい、実際の論文にはなかなかその効果が反映されないという傾向も見受けられます。

慶松　やはり目的意識の問題です。何のためにライティングをしているのか、それは論文に反映させるためである、という意識があまりないのですね。

山本　学生側にスキルを一体化させるということを求めるのが本来だとは思うのですが、その点においては、構成指導担当教員が学生の指導において一歩踏み込んで一体化させている、という点でも面白い試みではないかと思っています。

慶松　「この、その、あの」という指示代名詞を極力使わないというのも重要ですが、私は接続詞を極力使わない、という指導をしています。特に「そして」という接続詞はあまり意味がないですね。できるだけ接続詞なしで話がつながるようにすること、どうしても話が変わるという時だけ入れることが重要です。

山本　1 年次入学した直後からアカデミック・ライティングがスタートしますので、本来なら序論クラスのところで効果が出てきて、あまり文章指導をしなくても文章自体は良い水準で書けるというのが理想です。その延長上として、本論クラスや完成クラスの段階では、ほとんど文章面での指摘はせず、単純に論文全体のストーリーという面からの指摘に集中できるという程度になってくれれば、非常に理想的なのですが、現段階ではまだ少ないですね。

慶松　ストーリーがつながらない 1 つの理由としては助詞の使い方がまずいことが多いですね。助詞を変えるだけでずいぶんすっきりした文章になるケースがあります。

３．テーマ設定のあり方

山本　序論クラスにおける課題をまとめますと、形式面もさることながら、テーマそれ自体をどのように効率的に見出していくか、という点は重要ですね。それ自体が論文の作りやすさ、完成のしやすさにつながっていると感じます。小山先生が「税大論叢」にこだわられているということは、確かに 1 つの方法ですね。果たして良いテーマ、書き易いテーマとはどういうものなのか。ちなみに小山先生が考える良いテーマというのはどういうものでしょうか。こういう形だと書き易いのではないか、こういうふうにテーマを考えていくことが望ましいのではないか、という点についてお考えをお聞かせいただけますか。

小山　法人税法でいえば「22 条にはじまって、22 条に終わる」と、昔、私の先輩に教わっ

たのですが、やはり 22 条が中心です。22 条が理解できれば法人税法は理解できると言ってもいいのではないでしょうか。ただし、22 条それ自体は根幹的なものですので、むしろ 22 条の理解に繋がるようなテーマを修士論文としては取り上げた方が良いと思います。例えば、22 条につながるものとして 37 条の寄附金課税の問題が挙げられます。そういったところを軸にテーマを検討するのが良いのではないでしょうか。とりわけ初学者というか、税法に対する理解を深めることを優先するなら、ベーシックな寄附金課税や交際費課税を軸とする設定が望ましいと思います。

山本　ありがとうございます。では、伊東先生いかがでしょうか。伊東先生には主に所得税のテーマの方を中心にご担当いただいておりますので、小山先生とはまた異なる感慨をお持ちではないかと思っております。

伊東　本人の希望を別にすれば、書きたいテーマを選ぶことが完成への近道だろうと思います。ただし、見込み違いがあればご破算だし、そうでなくても特定のテーマに集中する傾向がありますから、いかに差別化を図るか特色を出すかが重要でしょう。

所得税法は、消費活動と事業活動を行う個人の特性、累進税率の採用などに基因するものが書きどころという感じがします。そこで個人単位課税の例外規定である 56 条や 10 種類に区分された各所得をテーマに選ぶ人が多いですね。所得区分では譲渡が最も難解と思います。未実現のキャピタルゲインとの関係、民法相続との関係が整理できるかどうか、不動産は資産所得としての位置付けと損益通算の問題、給与は帰納的に把握するしかない所得の意義などのポイントを早く押さえることが大切だと思います。

山本　伊東先生とコンビを組んで相当な定着感のある春日先生はどうお考えでしょうか。先ほど分業がしっかりしているという話もありましたが、そうは言ってもここまでの蓄積は相当なものですから、何かテーマ設定に関してご意見があると思います。

春日　所得税法で最近取り組む学生が多いのは譲渡所得です。譲渡所得の話というのは、対象にもよりますが、条文が何段階も重なっていて、まず入り口の条文から複雑に絡み合い、最終的に具体的な課税がどうなるか、というような話になる場合が多いです。その過程をしっかり整理するだけでも非常に税法の勉強になると思います。1 つ 1 つ条文を解きほぐし、その条文についてどう考えるべきなのか、ということを理論的に整理するプロセスが求められますので、その過程の中で、税法とは何なのか、法律の解釈とはどういうことなのか、など、本質的な思考につながります。ただ、そういう面では、初学者の方にとってはハードルの高いテーマではありますね。

自分自身の結論に到達するまでに、いかに条文をすっきり理解するかということが求められるようなテーマが、特に租税法の修士論文テーマという点では良いテーマなのかなと感じます。

山本　適切に条文を解釈する訓練が、税法の修士論文に最も求められていることだと私も思います。ある程度経験のある方であれば、譲渡所得のような非常に複雑な税制を前提に、まさにプロとしてのスキルを深めるような方向があるでしょうし、一方で、携わり始めて日がない人にとっては、基本的な条文を基本的に読み解くというようなテーマ設定が取り組みやすいのではないでしょうか。

慶松　良いテーマ、書き易いテーマというのは、目的を設定した時に結論が少し見えているというようなものだと思いますね。一番初めから全体の絵が見えているようなものです。ただ、言うは易くで、なかなかそれが難しいのですが。

　またテーマについてもう１つ言うと、修士論文に取り組む学生の数が大変多くなってくると、どうしてもテーマの重複が起きてきます。同じテーマでも、区別の仕方が違うとか論理展開が違うということがあれば問題ないのですが、どうしてもだんだんと範囲が狭まってきてしまっているのかとは感じています。

山本　確かにテーマの重複というのは１つの大きな問題ですね。そこに対処するという意味で、過去の学生の修士論文のコピーはさせず閲覧のみ可、ファイルの交換は厳禁として、「自分の頭で考えて下さい」とするのが本学としてはギリギリのラインなのではないかと思います。テーマが重複してもある程度はしかたがないといいますか、同じ資料を使っても、それから後は自分自身で考えて作成して下さい、というところでしょうか。

Ⅱ. 税法修士論文指導の効率性向上の鍵

山本　目的を設定した段階で結論がある程度みえているという状況は本当に理想形で、そういう意味では、合格している序論というのは、個人差はありますが、かなり結論まで見えている場合が多いのではないかと思います。まれに、序論は形式上合格していても、実際には何も見えていないという方がいます。そのような方の場合、なかなか標準年限で修了するのは難しくなります。

　そういう意味では、序論に早く合格した上で、なおかつどれだけ熟思できるか。そのためには何をどうすればいいのかというところは難しい問題ですね。

１．結論の早期構想と目次の詳細化

慶松　私の場合は、序論作成の途中で、時々「これで結論はどこにいくんですか？」という質問をします。

山本　確かに結論を問うということで、全体を構想することにつながりますね。

春日　私は目次を細かくチェックします。やはり、道筋がきちんと見えているかというところが重要なので、細かく質問を重ねながら進めています。

慶松　結論が概ね見えていて、そこに到達する道筋はどうかというものが目次で、目次は研究手段ですので、目次をチェックするということは、まず手段をはっきりさせるということになりますね。ウンベルト・エーコの『論文作法』を読むと、確かに「まず序論と目次を書け」と書いてあります。何をやるんだ、どういうふうにやるんだ、そこまでができれば概ね最後の絵が見えているということは言えます。

２．プレ結論・本論クラスのポイント：出口を意識し続ける

山本　本論クラス、完成クラスと進んでいった時に、文章が巨大化してくると、当初自分が何を考えていたのかわからなくなってくるという現象がでてきます。特に、完成クラスで最後追い込まないといけない段階になって、迷い道に入ってしまうケースがあると、どう指導していくべきか悩みますね。

伊東・春日班は、マイルストーンにかなり忠実に進められているなと感じていまして、本論クラスに進んだら、まずしっかりと結論を固めさせ、議論を積み重ねるというやり方をされていますね。私の担当する班では、各学生の状況にどうしても合わせてしまうという部分がありまして、例えば、序論が完成し、授業のない休みの期間が明けて会ってみると、学生の状況がいろいろ変っている場合があり、「序論ではこうなっていますが、ここまでは到達できないかもしれないので、もう少し結論を手前に持ってきましょうか」というような配慮をしてしまい、当初の序論の内容とは違う方向で進んでしまう場合もあります。手さぐりでゾーンディフェンス的にずっとサポートし続けて、何とか最後まで到達させるという状況が見受けられるということです。

これを効率化するには、伊東・春日班のように、もっとマイルストーンに厳格に従って進めたほうが良いのかなということは考えています。

春日　分業が非常にはっきりしているということが1つにはあります。隔週で、伊東先生と私の指導を交互にすることで、伊東先生に指導を受ける週はとにかく結論について話し、私が担当する週は、その段階で書いている本文について指導していくということに集中しています。このやり方だと、1回当たりの1対1での指導時間を30分はとれるので、腰を据えてじっくりやり取りができるというメリットも感じています。隔週でも、結論について伊東先生としっかり指導していくので、常に結論については明確にして進められますし、本論をどんどん作成していきましょうという時にも、その結論に向かってどうもっていくかという点を学生には意識させてやっています。

特に、そこに至るまでに重要なのが先行研究でして、先行研究の章をどのように固めていくのかということですね。序論合格した後の本論クラスでは比較的時間的にも精神的にも余裕がある時期なので、じっくりフローチャートを作成してもらったりしながら、話を練り上げていきます。

伊東　文章や構成面は、春日先生のお力を頼りにして、私は税法的に論理が一貫しているか、筋が通っているかを中心にみることになります。結論も極めて重視しますが、その結論はA説であれB説であれ、この説でなければならないということはありません。要はA説の結論に至る論証がきちんとされているかどうかがポイントです。論文とは文章で他人を説得するものですから説得力がなければ意味がありません。説得力とは事実関係がきちんと把握され論理に矛盾や綻びがないことです。そのためにはしっかりと条文や訴訟当事者の主張や裁判所の判断を把握、理解しているかが問われます。経験的にはこれまでこの点が不足している論文が散見されましたので、特に注意を払っています。

山本　慶松・小山班では、本論クラスや完成クラスはどのように進められていますか。

慶松　本論クラスでは結論を固めていきましょうということで進めていますが、完成クラスに進むと、最後のところで結論が少し変わってくる場合もあり、私はそれを認めています。その場合は、序論の目的をそれに合わせるように変更しても構わないと言っています。論文全体の道筋が通ってさえいれば、進めていくうちに結論が変わってきても良いという考えです。

小山　私の指導では先行研究を重視していま

す。どの先行研究を参照して自身の結論にもっていくか、ということをしっかりと議論します。「税大論叢」に出ている先行研究から良いものをピックアップして進めていきます。私も、それによって結論が多少変わってきても、それはそれで良いという考えです。

山本　序論クラスまではかなり明確な目的意識を我々の間でも共有していると思いますし、完成クラスは最終的に完成させるということで絶対的にエネルギーを集中させるのですが、本論クラスは、少し緩慢になってしまう傾向がある気がします。そういう意味では、本論クラスでどのようにプロセス管理をしていけばいいのか、という点について先生方にお知恵をいただきたいところです。

慶松　本論クラスがある意味、一番考える段階です。どういう結論にしようかと、そこで一番もまないといけません。私の指導では、どういう話でどういう結論があるのかという点はかなりしつこく聞いています。

山本　出口を常に意識させ続けて、そのためにどういうお話にしますか、ということがポイントですね。

慶松　序論クラスでも本論クラスでも言っていることはいつも同じで「最後どうなる」ということですね。

３．フローチャートの有用性

春日　文章指導担当の望月先生のご提案もきっかけとして、最近取り組んでいることは、フローチャートを作ってもらうということです。先行研究の検討といっても、なかなか形にしづらいといいますか、1 つの章として書き上げるには相当な文献数を読み込んで整理し、それを文章に落としてということで、かなり時間がかかります。文章が出来上がってくるのを待っているだけですと、どうしてもそのプロセスの中で指導ができないといいますか、最終的に出来上がったものだけをみても全然違った方向にいっていたりして、結局もう一度やりなおしということになり、時間のロスにつながります。

文章を書き上げる前に、特に先行研究の検討・整理の段階では、フローチャートを作成していくことが有用だと感じています。また、このフローチャートが最終的な結論にいたる地図になるのではないかと思っています。それがしっかりできると、どういうプロセスでその後の議論を運んでいけば良いのかということが非常にすっきりします。

なんとかてっとり早く可視化してもらうためのフローチャートなので、それを作ることだけでかなり頭を使うと思うんですね。隔週で学生と話す際に、学生が作成してきたフローチャートをもとにして「この部分はどういうことですか」というような指摘をしながら、序論で掲げている目的から結論に至るまでの地図が、そのフローチャートによってある程度見えるようにしています。自分は税法の専門家ではありませんので、その部分がはっきりしていないと指導ができません。税法の専門家でなくてもわかるような地図をまず作ってもらうことで、テーマについての文献もしっかり整理され、先行研究の章をそれに沿った形で論理立てて作れるようになるのではないかと思っています。まだ試行錯誤中ではありますが。

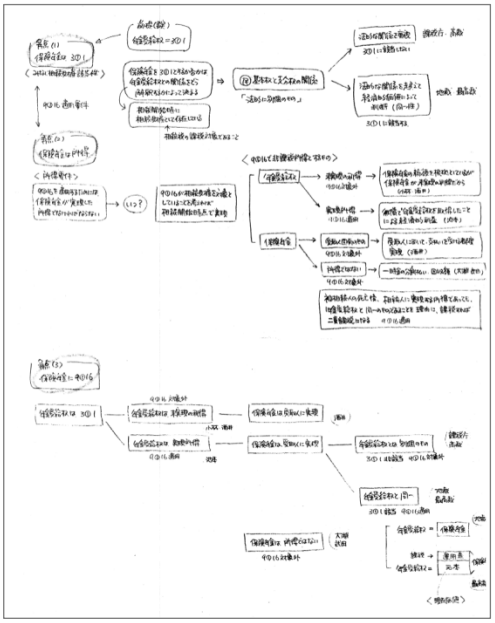
慶松　フローチャートができるということは非常に良いことだとは思いますが、逆にいうと限られた時間の中で、フローチャートというと、そこにかなりの時間をとられて

しまう心配はないかなとも思います。

春日　沿革や概要の章など、書けるところはどんどん書いて字数を増やしていくことも同時に進めながら、その上でフローチャートも作ってきて下さいというふうにしています。

山本　フローチャートはどのくらいの精度のものなのですか。

春日　こちらが実際に学生が作成したフローチャートです。



一同　これはすごいものですね。

春日　実は、これを作成した学生は自主的に作ったのですが、これもフローチャートを活用した指導のヒントとなりました。こういうものを作った上で、ではこの部分は先行研究の整理の章の第何節にしましょうか、ということを相談して進めます。私もこのフローチャートを見て初めて全体的な話が見えてくるというところがあります。

これまでは話の流れが見えないことで困ることが多く、最終的に完成クラスに入ってから論文全体の流れがようやく見えてくることが多かったのですが、そういうことでは非常に遅いなと感じていました。先にフローチャートを作ってもらうと、全体の話が見えますので、ではこの部分は第何章のどこに落としていきましょうというようなアドバイスができるようになります。

時間にまだ余裕がある本論クラスの時期に、できるだけ学生に悩んでもらい、フローチャートを作ってもらうことは、効率的なことなのかな、と感じ始めています。

山本　大変りっぱなものをお見せいただきました。私は、現状でも、完成クラスの追い込みになってようやく全体の話が見えてくるということがあり、学生本人の中でもなかなか結論まで見えてこない場合は、こちら主導で結論までの流れを作ってしまうというような、学生ごとに指導の内容を分けて対応している状況です。やはり、本論クラスの時に先んじて手を打つことが必要かなと感じますね。

春日　フローチャートが作れないということは、自分でも整理がついていないということですので、整理をするために伊東先生に質問や相談をしてみてくださいと言っています。

それを受けて、整理をしたものを作ってもらいます。また、どうしても要領を得ない場合は、学生と問答を繰り返しながら、論文の目的から結論にどう話をもっていくかの流れを一緒に考え、その場で簡単なフローチャートを描くこともあります。それを繰り返すことで、本人の中でも文献の海の中から徐々にどう話をもっていけばいいのか、学説を整理していったらいいのかという点が見えてくるのだと思います。

山本　春日先生の成功事例から考えると、税法指導の教員と構成指導の教員の役割を明確にしたほうがいいのか、どうでしょうか。ケースバイケースというところはあると思いますが。

慶松　私は構成指導ではありますが、かなり税法まで含めて指導している面はあります。

山本　私も同様な面がありまして、結論までの構築の仕方などは、私が担当する場合も多いです。伊東先生と春日先生の場合には、伊東先生が税法的な観点から指導して、春日先生は構成指導に特化して指導しているので、その面でうまくいっていますね。

慶松　フローチャート方式は非常に良いですが、このようなチャートが作成できる方は、頭の中でも整理ができているということですので、わざわざ作ってもらわなくても、言葉で説明してもらってもある程度わかる、ということもいえますね。

山本　本論クラスや完成クラスの中でなかなか完成に近づかない学生の場合、禅問答的な時間が非常に長く続くという傾向があります。それを脱却するために、書けなくても書いてもらうほうがいいのか、それが余計な負荷になるのであれば、今のやり方のほうがいいのか、迷いますね。

春日　皆がみな、最初から立派なものが出てくるわけではなく、最初はとても意味の分からないものが出てくる場合がほとんどです。そこをいろいろと指導しながら、整理していくということですね。そういう意味では、フローチャートを作ることが目的なのではなく、論文の話の流れを整理し教員と学生の間で可視化するためのツールとして考えています。

山本　マイルストーン方式は、序論クラスまではかなり明確ですが、本論に入ってからのマイルストーンは文章量が多いため、作業すべき量、調べたり考えたりする量も多くて、学生によっていろいろ違いが出てしまっている状況が見受けられます。チャート図はそういう意味でも 1 つの手がかりになると思います。

Ⅲ．税法修士論文指導における IT の活用

山本　もう 1 つ、本学の論文指導の体制で非常に特長的なのが IT の活用です。横井先生に尽力いただいているので少しお話いただけますか。

横井　資源が限られる中で多くの修士論文執筆希望者を指導するために、IT をいかに効率的に活用するかは毎期、試行錯誤を重ねてきました。

LEC 会計大学院　講師　横井隆志

メーリングリストをベースにやりとりをしていた当初は、やりとりされるメールの量も膨大になり、相当な混乱が生じました。

一元的な進捗の管理や効率的な情報共有を目指して様々なツールを模索し、2011 年度より、クラウド型グループウェアのサイボウズ live を採用しました。2 学年、4 段階のクラスで総勢 100 名を超える修士論文執筆者の進捗管理と情報共有を可能にする本会計大学院でのサイボウズ live 導入の事例は、サイボウズの Web ページでも紹介され、1,200 を超える「いいね！」をいただくなど、学外からも注目されました。

[活用事例] LEC 会計大学院 研究指導委員会 | サイボウズ Live

https://live.cybozu.co.jp/casestudy.html?q=2944

その後、細かい運用の方法やクラウドストレージとの連携などについてアップデートを重ね、現在はサイボウズ live、Gmail、Google Drive の 3 つを中心に運用しています。

本年度、サイボウズ live は、研究指導に携わる教員と事務局に限定した内部向けグループと学生への情報発信のためのグループと分けて、2 本立てで運営していますが、1 つの形として完成形に近いものが見えている気がしています。

従来は段階別に分かれたグループの中に学生個人の掲示板を配置して、毎週、学生が直接そこへ作成した論文ファイルをアップするというやり方を採用していました。教員だけで無く、同じグループの学生間で相互にファイルの閲覧ができることから、学生同士で積極的な議論が生まれるなど、可視化することで生じるメリットもあった一方で、他者のファイルが閲覧できてしまうことから生じるデメリットもあ

り、その後、運用方法を見直すに至りました。

現在は、毎週学生から提出される一論文ファイルは Gmail により一括で事務局が受信し、教員向けのグループ内に段階別・クラス別に設置された院生個人の掲示板に転載する方法を採用しています。この掲示板の活用法はグループによって様々ですが、学生からの提出内容について、メールでの指導、対面での指導の記録を税法担当・構成担当・文章表現担当の教員それぞれが書き込むことにより、一人一人の指導の履歴を一覧で管理でき、教員間のコミュニケーションの円滑化を支えているのではないかと感じています。また、各グループの状況を研究指導委員会全体で共有することにも貢献しているのではないでしょうか。

学生向けのグループは、あえて 4 段階のクラス別にするのではなく、租税法研究指導履修者全員を同じグループに登録した上で、各クラス別にトピックを配信しています。これは、その期に目指すべき到達目標だけでなく、2 年をかけて論文を完成させるまでにクリアしていくマイルストーンを常に意識することを念頭に置いています。先輩や後輩の動向も垣間見えることが、履修者にとって良い刺激になっているとの声を耳にします。

論文の形式の妥当性が広く問われることとなった昨今、本会計大学院では参考文献を PDF 化して提出させ、Google Drive を通じて指導教員と共有する取り組みを進めております。引用した論文の原典を教員と共有することにより、適切な形できちんと引用するという意識付けにもなっていますし、文献を自分自身でも丁寧に蓄積する、確実にさかのぼれる状況を意識的に確保しているという点でも良い効果を生んでいるのではないかと思っています。

慶松　正直に申し上げて、サイボウズはなかなか見きれていません。量が多すぎて自分の担当分を見るので精一杯で、他の先生の指導分を見る余裕がないのです。最後に出てきたものだけはきちんと見ていますが、途中経過まで見るということはなかなかできません。

山本　私も同じような状況です。最終的にできあがったところで、修正履歴をクリアした上でもう一回見る、ということでやっています。

春日　確かに、他の先生が指導された内容までファイルを開けてみるというところまではできませんが、私がサイボウズでメリットを感じているのは、学生一人一人の掲示板が設けられていることで、過去に自分がどういう指導をしたか、という点がタイムラインで見れるところが大変便利です。指導の一貫性という点で非常に役に立っています。

Ⅳ. 再びテーマ設定の重要性と対応策

山本　進行に苦労している学生はなかなか最後までできてこないので、ある程度分量が固まったとこで一気に対応するというのも仕方がないのかなと思っています。他に、私の班では序論合格になっているにも関わらず改めて見ると、ちょっと難しいぞという場合もあり、もう一度序論を書いてもらったり、その後も蛇行の連続で最近ではまるまる一章全部削除になったりしている人もいます。こちらがある程度構想を提案するのですが、それはこちら側の構想であって、学生自身の構想ではないので、書

き進めていくとどんどんずれてきたりします。そうなると、今ある状態のものでどう収めるか、そのための大規模手術をするというような状況が発生したりします。

慶松　何となく漠然とやることはわかっているけれども、それが的確にピンポイントで表現できているかというと、最後の最後になってできていないとわかることがありますね。

山本　そうなると、やはり課題はテーマ設定に戻るのでしょうか。

慶松　そうですね。序論の対象と目的が明確で、それが明確であるとすると答えがある程度見えているということですね。

山本　テーマの明確性をどのように担保するかという点では、条文を明確に明示させるというのも 1 つの方法だと思い始めました。対象は「何条の何」と書きなさいとフォーマット化しても良いかもしれません。

慶松　例えば、「対象は、役員の退職給与である」と書く人がいました。税法論文であるならば、そうではなくて「役員退職給与の税法上の取り扱いである」という書き方をしてくれないと困るわけです。いつも「あなたが書くのは税法論文ですよ」と言っているのですが、表現としてそういうふうにはなかなかならないですね。確かに「対象は税法何条です」というほうがいいのかもしれません。

山本　そうなると論文のテーマが全部「何条の研究」になりかねないですね。

慶松　いや、そのほうがむしろ税法論文らしいとも言えますね。まず原則的にはそう書いて、そう書けないときには抽象概念を使う、ということでもいいかもしれないです。

今後に向けて

山本　1 年目は現状のままでいいと思うんです。2 年目に向かってどういう取り組みをさせるかという点ですね。特に序論が早期に合格し始めると、早い段階で本論に入るわけですから、その本論のプロセス管理をもう少し標準化できれば非常に良いと思います。そうすれば、場合によっては早い人は 1 年半で完成してしまう人もでてくると思いますね。

慶松　それは理想的ですね。例えば、序論に早く合格した学生は本論クラスに入る前にフローチャートを書くということを 1 つマニュアル化してもいいかもしれないですね。序論合格後に安心してしまい、緩慢化するというのがなくなるかもしれないですね。

春日　やはり 2 年間で完成させるためには、本当に間断なく走らないと終わらないのは確かなので、1 つマイルストーンの段階をクリアすると何となく気が抜けてしまうという部分をいかに作らないかというのが重要だと思います。

慶松　常に頭の中に論文のことがあって、考えていることが必要です。それでずいぶん違います。論文というのは頭の中に構想があるということが重要なのです。そのためにはどうすればいいでしょうか。

山本　慶松先生のように「出口はどうなのか」ということを問いかけ続ける、そのことを文書化することが 1 つだと思います。

慶松　1 月半ばくらいで後期がいったん終わり、その後、確定申告の繁忙期、4 月新学期に入って論文をまたスタートした時に、全く忘れてしまっているようでは困りますね。そのつなぎをどうするかということは、かなり大きな問題ですね。

春日　8 月 9 月の夏期休暇期間には､8 月の終わりに 1 回提出してもらい、コメントするということを今年度実施しました。私の班では、構成指導の教員だけでなく、税法の教員からもコメントを出してもらい、学生から大変ありがたかったという声をもらいました。良い刺激になったのではないかと思います。それに準じて、例えば 2 月の終わりに 1 回提出してもらい、同じようにコメントするなど、検討課題として考えていく必要がありますね。

慶松　2 月 3 月よりも夏期のほうが、学生はまだ余裕はある時期ですね。プレ結論発表会が 3 月末にありますので、本論クラスの学生はそこを目指してもらうことになります。現状では完成クラスと序論クラスの学生が全く空いてしまうということですね。

山本　本論クラスに入ると、書くことに精いっぱいで全体的なイメージがとんでしまうということはあります。それを補完するという意味で、序論クラスをクリアした学生には、粗くてもフローチャート図などを書かせて整理させるということは良いのではないかと思います。

春日　今心がけているのは、2 年間の負荷をいかに均等化するか、ということです。完成クラスでものすごい負荷が集中するのは学生も苦しいと思うんです。そうなるよりは、遊ぶ時間を減らして、なるべく均等に負荷をかけながら、一歩一歩完成まで無理せずに達成させるのが重要かなと感じています。そのための方策を何かとれたらいいなと思います。

慶松　大まかなフローチャートをマニュアル化して、これに入れ込みなさいというのは 1 つのやり方ではないかと思いますね。テーマによってフローチャートの書き方は違うかと思いますが、うまくやればフォーマットができるのではないでしょうか。

山本　本学の林總先生が「マインドマップ」を使って原稿を執筆されているとおっしゃっていますが、参考にできるかもしれません。

慶松　いろんなことが学生の中で 1 つになっていないんですね。林先生に論文指導のクラスの中で特別授業をしてもらっていますが、どうして林先生に話をしてもらっているのかということです。ベストセラーを書くのも論文を書くのもプロセスは同じですよということですよね。先ほど話に出たようにアカデミック・ライティングがどうして必要かということにあまり意識がないことと同じですね。

山本　この座談会は第 13 号に継続して掲載することを考えて、マイルストーン管理の精緻化・進化についてもう一度機会を設けたいと思います。本日はありがとうございました。